

■（２５９）津波で消えていく戦後の歴史 呑ん兵衛横丁

岩手県釜石市の呑ん兵衛横丁は、単なる津波で被災した飲み屋街ではありません。太平洋戦争で本土初の艦砲射撃を受けて焼け野原になった鉄のまち。そこからの復興や高度成長、バブル崩壊という時間を市民とともに歩んできました。その歴史が終わります。

戦後復興で鉄の需要が高まった時期、東京から遠い三陸地方の市とは思えないほどにぎわいました。路上には戦争未亡人らが屋台の飲み屋を出しました。それを工場脇の水路の上に集めたのが、横丁の原点です。カウンターだけの小さな店がつながる長屋風の横丁には、三交代の製鉄所従業員らが昼間から出入りしました。その後、合理化で製鉄所の高炉の火が消えます。地元経済は右肩下がりで、国内初の金融機関のはたんも釜石でした。それでも横丁は続きます。高齢などの理由で閉めた店にも次の世代が「起業」しました。いつまでも「戦後の昭和」を思わせるたたずまいは観光名所にもなりました。

でも、津波には勝てませんでした。プレハブ仮設の飲食街で再起をめざしましたが、それぞれの事情もあり、再建は不可能です。この３１日が最終日です。残念です（山）